

第五十三章 使我介然

我をして介然として（慎重に）つかさどる（知る）ことありて大道をおこなわしめんとするも唯
ほどこすことを、これ畏る。（私にしばらく大道を實行させられるとしても私には畏ろしい）
大道は甚だ夷（たいら）なるも民はけい（細道）を好むなり。
朝は甚だ除（じょ）し（庭が除草してある）、田は甚だ蕪（あ）れ、倉は甚だ虚（むな）し、
文采（さい）を服し（錦の官服を着て）利剣を帯び、飲食にあき、財貨はあまりあり。
これを盗竿（とろう、盗賊の誇り）というなり。非道なる哉。

〔訳者註〕

これは老子の時代の為政者に向つての悪罵である。今日でも新鮮な痰呵である。

第五十四章 善建不拔

よく建つる者はぬけず、よく抱くものは脱せず。（一〇章参照）子孫は以て祭祀（さいし）して
やまず、
これを身に修すればその徳はすなわち真。（立身齊家治國平天下は孔子の教えた偽道徳）

これを家に修むればその徳はすなわちあまりあり、
これを郷に修むればその徳はすなわち長し。

これを國に修むればその徳はすなわち豊かなり。

これを天下に修むればその徳はすなわちあまねし。（修む、みづから実行してゆく、修養する）
故に身を以て身を觀（自分が自分を内省する）、家を以て家を觀、郷をもつて郷を觀（我をもと
にせず、他の身になって見る）、國を以て國を觀、天下を以て天下を觀る。
われ何を以て天下のしかるを知る哉。これを以てなり。

〔訳者註〕

孔子の徒の利己的「立身・齊家・治國・平天下」の旧墨守に対抗して老子は「徳の真
理として自己を知れ」とすすめた。

第五十五章 含徳之厚

含徳の厚きは赤子に比す。

毒虫もささず、猛獸もよらず、攫鳥（かくちよう）もはうたず。

骨は弱く、すじはやわらかにして、しかも握（にぎ）ることはかたし。いまだ牝牡（ひそう）の

合うことを知らざるも、さい（小児の性器）のおこることは精の至りなり。
終日さげべどもしかものどのかれざるは和の至りなり。

和を知るを常といい、常を知るを明といい、精を益（ま）すを祥といい、心の気を使うを強とい
う。ものさかんなればすなわち老ゆ。これを不道という。不道なればすなわち早くやむなり。
（不道は非道で無理をすること）

〔訳者註〕

赤児は徳にとみ、不徳がない。人は成長して栄えるから亡びることになる。道は不断
に調和するからほろびない。（三〇章参照）

第五十六章 智者不言

知る者は言わず、言う者は知らざるなり。

その兌（えい）をふさぎ（兌は口）、門をとぢ（五二章参照）、その鋭をくじき、その紛（ふん）
を解き、その光をやわらげ、その塵におなじくす。（四章参照）

これを玄同（げんどう、和光同塵の真の智者）という。
故に（道と一つになった人は）、得てしたしむべからず、また得て疎（うと）んずべからず、得

て利するべからず、また得て害すべからず。得て貴（たっとくす）べからず。また得ていやしく
すべからず。

故に、天下の貴と成るなり。（四章参照）

〔訳者註〕

道と一つになった玄同の真の智者は光や塵の人々に自から混入する達成した得道者の
目立たない謙遜を意味する。

第五十七章 以上治国

正をもって国をおさめ、奇（奇計、べてん）を以て兵を用う。

無事（むじ）を以て天下を取るなり。

我は何を以てかそのしかるを知るや。

これを以てなり。（兵は謀略で動かせるが、国は無為で事を起こさず、ストやボイコットでなく
ては平定できない）

それ天下に忌諱（きぎ、禁止）を多くすればしかも民はいよいよ貧し、
民利器を多くすれば国家ますますくらし。

人に技巧を多くすれば奇物はますますおこる。
法令ますますあきらかならば盜賊あること多し。

故に聖人は云う、我は無為なるも、しかも民は自ら化す。(自分で進化して道につく)

我は静を好むも、しかも民は自ら正し。

我は無事なるも、しかも民は自ら富む。

我は無欲なるも、しかも民は自ら樸なりと。(樸は一五、一九、二八、三二、三七章参照)

〔訳者註〕

この章は人が人を統治する政治なるものに反対する最も早い時代の無政府主義の主張であった。国家と法律と資本主義の否定は先づ老子によって率先して宣言された。

第五十八章 其政悶悶

その政悶悶(もんもん)なれば(不完全なら)、その民は醇醇(じゅんじゅん)たらん(純情であらう)

その政察察(さつさつ、嚴重)たれば、その民は缺缺(不平不満)たらん。
禍兮(禍は)福のよるところにして、福兮(福は)禍の伏するところなり。

いづれかその極を知らんや。それ止耶(しや、終り)なきなり。

正は復すれば(過度になると、やりすぎると)奇となり(あやしくなる、いつわりになる)善は復すれば妖(よう)となる(わざわいになる)

人の迷うやその日固(まこと)に久し矣。

是を以て聖人は方(方正)なれど割かず(人と争って仲たがいしない)

廉なれど(するどくとがるが)けずらず、直なれど肆(し)ならず(わがままにのびない)光あれどかがやかず。

〔訳者註〕

最もよい統治は最も悪い統治であるという。過ぎたるは及ばざる方がよいのだ。

第五十九章 治人事天

人をおさめ天につかうるには、嗇(しやく)にしくはなし(やぶさか、より以上のものはない)それただ嗇(しやく)なる、これを早復という。(ひかえ目にしていれば自然の適度にすぐ戻れる)早復はこれを重責徳という。(徳を積み重ねるのは控えめにする態度から来る)

重責徳なれば克（こく）せざることなし。（勝たないことはない）克せざることなければ、すなわちその極を知ることなし。その極を知ることなければ以て国を有（たもつ）べし。（極、ゆきづまりがなければ）国を保つのはもって長久なるべし。これを深根固帯（しんこんこでい、深い根のかたまり）、長生久視（大木のように風雪にたえる）の道というなり。

〔訳者註〕

自然と人間を統治するには消極的な貪欲と儉約が必要である。そうすれば長くつづけられるのである。略奪的文明への警告である。

第六十章 治大国

大国をおさむるは小鮮（こせきかな）をにるがごとし。

道を以て天下にのぞめば鬼も神（しん）ならず。（鬼、正義人道の反対者。神、超人能力者の仮想）

その鬼の神ならざるのみにはあらず、その神も人をやぶらず。

その神人をやぶらず。聖人もまた人をやぶらざるなり。

それふたつながら相やぶらず、故に徳はこもごも帰するなり、焉。

〔訳者註〕

国家を統治するには人民にあまりさわってはならぬ。道によって国をおさめさえすれば、反対者の悪魔も神通力はないのだ。神や聖人が人間をそこなわなければ万物は徳に帰するだろう。

第六十一章 大国者下流

大国は下流にして天下の交なり。（交、集合体）

天下の牝（ひん）なり。牝は常に静をもって牡（そう）に勝ち、静をもつてくだることをなすなり。

故に大国はもって小国にくだれば、すなわち小国を取り、小国はもって大国にくだれば、すなわち大国に取らる。

故に或は下って以て取り、或は下りて取らる。

大国は人を畜（やしな）わんと兼ね欲するにすぎず。

小国は入りて人につかえんと欲するにすぎず。

その両者はおのおの欲するところを得るなり。
故に大なるものはよろしく下ることをなすべし。

〔訳者註〕

ここに相互扶助の原則の本質が示してある。より強大なものは、より弱小なものとの協力せねばならぬ。そうすれば万物は調和して進むことができるのである。

第六十二章 道者万物之奥

道は万物の奥（おう）、善人の宝、不善人の保つ所なり。（護身）
美言は以て市（うる）べく、尊行は以て人に加うべし。

人の不善なる何のこれすつることかあらん。（大切な反省資料である）

故に天子を立て三公（三大臣）を置くなり。

拱壁（こうへき）、人材を招聘する贈物の玉、駟馬（しば、王の馬車）に先だつことありといえども、

坐（い）ながらにしてこの道に進むにはしからず。

いにしえのこの道をたつとぶゆえんものは何ぞや。

いわずや、罪あるも求むれば以て得、以てまぬがると。
故に天下の貴となるなり。

〔訳者註〕

「求めよ、さらば与えられん」というキリスト教の原則はすでに早くから中国でも言われていた。道の真理はすべての求める人々にあまねく行き渡るのである。

第六十三章 為無為

無為をなし、無事をこととし、無味を味わい、
小を大とし、すくなきを多とし、うらみに報ゆるに徳を以てす。（七九章参照）
難をその易（やす）きにはかり、その細に大をなす、

天下の難事は必ず易（やす）きにおこり、

天下の大事は必ず細よりおこる。

これを以て聖人はついに大をなさず、
故によくその大をなすなり。

それ軽諾は必ず寡信（かしん）にして、多易は必ず多難なり。

これを以て聖人すらなおこれは難（かたし）とす。
故に『いに難（かた）きことなきなり。』

〔訳者註〕

恨みに報ゆるに徳を以てせよ、というのは倫理の極地である。博愛の宗教精神は老子の後継である。

第六十四章 其安易持

その安きは持（じ）しやすく、その未だ兆（きざさ）ざるは謀りやすく。

そのもろきは破りやすく、その微なるは散じやすし。

いまだ有らざるにこれをなし、いまだ乱れざるにこれをおさむ。

合抱（ごうほう）、いくかかえもある太い）木も毫末（ごうまつ）より生じ、

九層の台（九階だてのビル）も累土（るいど）、一かけの土）よりおこり、

千里の行も足下より始まるなり。

なす者はこれをやぶり、とるものはこれを失う。

聖人はなすことなし、故にやぶることなし。とることなし、故に失うことなし。

民の事に従うや常にはほとんど成らんとすにおいて、しかもこれをやぶる。

終をつつしむこと始めの如くなればすなわちやぶることなきなり。

これを以て聖人は欲せざるを欲して得がたきの貨（たから）をたつとばず。

学ばざるを学びて衆人の過ぐるところに復し（世間の人が見かえらずに通りすぎるところへ帰り）

もって万物の自然をたすけて、しかもあえてなさざるなり。（自然と協力するが、無為（むい）

で自然にしたがい、有為（うい）の不自然な人工はしない）

〔訳者註〕

聖人（理想的の人物）は自然と協力するが、自分が望んで行動しない。それ故、万事が順序よく進むのである。

第六十五章 古之善為道

いにしえのよく道をおさむる者は以て民を明かにするに非らず。

まさに以てこれを愚にせんとするなり、民のおさめがたきはその智多きを以てなり。

智を以て国をおさむるは国の賊なり。

智を以て国をおさめざるは国の福なり。

この両者を知るはまた楷式（かいしき、規則、形式の模範）なり。常に楷式を知るはこれを玄德という。（玄德、徳の極致）
玄德は深し、矣、遠し、矣。
物とは反せり、矣。（物質の法則とはちがっている）
すなわち、大順に至るなり。（大順は宇宙秩序で、人類だけの法律・規則とは丸でちがう）

〔訳者註〕

不思議な道の奥儀とその方式は物質的法則に従って進行するのではなくて、宇宙の大秩序を指向しているのである。

第六十六章 江海為百谷王

江海のよく百谷の王たるゆゑんものは其よくこれに下るを以てなり。
故によく百谷の王となるなり。

これをもって聖人は民に上たらんと欲せば必ず言を以てこれにくだり、民に先だたと欲せば、必ず身を以てこれにおくるるなり。これを以て聖人は上におるも、しかも民は重しとせず、前におるもしかも民は害とせざるなり。

これを以て天下は推（お）すことを楽しみ、しかもいとわず、
その争はざるを以ての故に天下はよくこれと争うことなきなり。

〔訳者註〕

謙讓、自己がへりくだることが、そこに万人の結果と信頼が結果する。それで世界はその人を模範に推すのだ。

第六十七章 天下皆謂

天下みな我を大なれど不肖に似たりというも（不肖は師や父に似ていない者との自称）、
それたが大なるが故に不肖に似たるなり。（世の中の人は私（老子）は大きい人物、大胆な人だが、世俗の先輩に謙讓する不肖（ふしょう）の人に似ているという）
もし肖ならばその細なること久しきかな矣。（私はただもし不肖なら世俗の小さい事にも久しく従事するのだが、胆ったまが大きいから不肖に似ているだけなのだ）
我に三宝あり、宝としてこれを持す。

一にいわく慈、二にいわく儉（節約）、三にいわく敢えて天下の先とならざること。（指導者にならない）

慈（めぐみ深い、人道的）なるが故によく勇なり、儉なるが故によく広し。（儉約するから広く分け与えられる）

あえて天下の先とならざるがよく成器長たり（才能ある人材の長に成る人物）
今は（もしも）慈をすててまさに勇ならんとし、儉をすててまさに広からんとし、

後たることをすててまさに先たらんとす、

死なるかな矣。（指導者になつたら私には死である）

それ慈はもつて戦えばすなわち勝ち、もつて守ればすなわちかたし。（人道のいつくしみは戦争よりも強い）

天はまさにこれを以て慈を救い、これを守らんとす。

〔訳者註〕

老子はこの三宝の原則を自分の規律とした。それはガンジの非暴力の抵抗の真理と同じものを直観したと思われる。（この章は異本もあり、素読のしかたも学者によりちがう。この訳はこれも井上秀天氏に従った）